

無線局運用規則抜粋

(無線通信の原則)

第 10 条

必要のない無線通信は、これを行なつてはならない。

- 2 無線通信に使用する用語は、できる限り簡潔でなければならない。
- 3 無線通信を行うときは、自局の識別信号を付して、その出所を明らかにしなければならない。

(モールス符号の使用)

第 12 条

モールス無線電信による通信(以下「モールス無線通信」という。)には、別表第 1 号に掲げるモールス符号を用いなければならない

別表第一号

注一「符号の線および間隔」

一線の長さは、三点に等しい。

一符号を作る各線又は点の間隔は、一点に等しい。

二符号の間隔は三点に等しい。

二語の間隔は、七点に等しい。

(送信速度等)

第 15 条

無線電信通信の手送りによる通報の送信速度の標準は、一分間について次のとおりとする。

和文 七十五字

欧文暗語 十六語

欧文普通語 二十語

- 2 前項の送信速度は、空間の状態及び受信者の技倆その他相手局の受信状態に応じて調節しなければならない。
- 3 遭難通信、緊急通信又は安全通信に係る第 1 項の送信速度は、同項の規定にかかわらず、原則として、一分間について和文七十字、欧文十六語をこえてはならない。

(呼出し)

第 20 条

呼出しは、順次送信する次に掲げる事項(以下「呼出事項」という。)によつて行うものとする。

- 一 相手局の呼出符号 三回以下(海上移動業務にあつては二回以下)
- 二 DE 一回
- 三 自局の呼出符号 三回以下(海上移動業務にあつては二回以下)
- 四 K

2 省略

(応答)

第 23 条

無線局は、自局に対する呼出しを受信したときは、直ちに応答しなければならない。

- 2 前項の規定による応答は、順次送信する次に掲げる事項(以下「応答事項」という。)によつて行うものとする。

- 一 相手局の呼出符号 三回以下(海上移動業務にあつては二回以下)
- 二 DE 一回
- 三 自局の呼出符号 一回

3 省略

(不確実な呼出しに対する応答)

第 26 条

無線局は、自局に対する呼出しであることが確実でない呼出しを受信したときは、その呼出しが反覆され、且つ、自局に対する呼出しであることが確実に判明するまで応答してはならない。

- 2 自局に対する呼出しを受信した場合において、呼出局の呼出符号が不確実であるときは、応答事項のうち相手局の呼出符号の代りに「QRZ？」を使用して、直ちに応答しなければならない。

(長時間の送信)

第 30 条

無線局は、長時間継続して通報を送信するときは、三十分(アマチュア局にあつては十分)ごとを標準として適当に「DE」及び自局の呼出符号を送信しなければならない。

(試験電波の発射)

第 39 条

無線局は、無線機器の試験又は調整のため電波の発射を必要とするときは、発射する前に自局の発射しようとする電波の周波数及びその他必要と認める周波数によつて聴守し、他の無線局の通信に混信を与えないことを確かめた後、次の符号を順次送

信し、更に一分間聴守を行い、他の無線局から停止の請求がない場合に限り、「VVV」の連続及び自局の呼出符号一回を送信しなければならない。この場合において、「VVV」の連続及び自局の呼出符号の送信は、十秒間をこえてはならない。

一 EX 三回

二 DE 一回

三 自局の呼出符号 三回

2 前項の試験又は調整中は、しばしばその電波の周波数により聴守を行い、他の無線局から停止の要求がないかどうかを確かめなければならない。

3 第一項後段の規定にかかわらず、海上移動業務以外の業務の無線局にあつては必要があるときは、十秒間をこえて「VVV」の連続及び自局の呼出符号の送信をすることができる。

プラトー現象(plateau) plateau:安定状態に達する, 横ばい状態になる

マルコーニが無線電信の公開実験を最初に行ったのは 1895(明治 28)年、日本海軍が無線電信の実験に成功したのは明治 30 年